

ボウイ★
その生と死に

BOWIE

CRITCHLEY

サイモン・クリッチリー

田中 純 訳



ボウイとは、彼の音楽とは、そのアートとは何かを改めて考えさせてくれる素晴らしい本だ。これほど深くボウイを、そしてポップアートを語る「言葉」は、これまでなかったのではないか。ボウイを考えることは、現代文明、その哲学、音楽、アートを考えることだと教えてくれる。「自分とは誰かということ」を忘れさせ、自分であることから脱出させてくれる「ボウイ」。

まがいのものリフエイクとして真実、無としてのリアリティを歌い、死までもアートにしてしまったボウイ。

nothing remains.

彼はボウイというアートを作りあげる最高のアーティストだったのではないか。

坂本龍一

(音楽家)

BOWIE

ボウイ
その生と死に

BOWIE★

CRITCHLEY

サイモン・クリッチリー

田中 純 訳



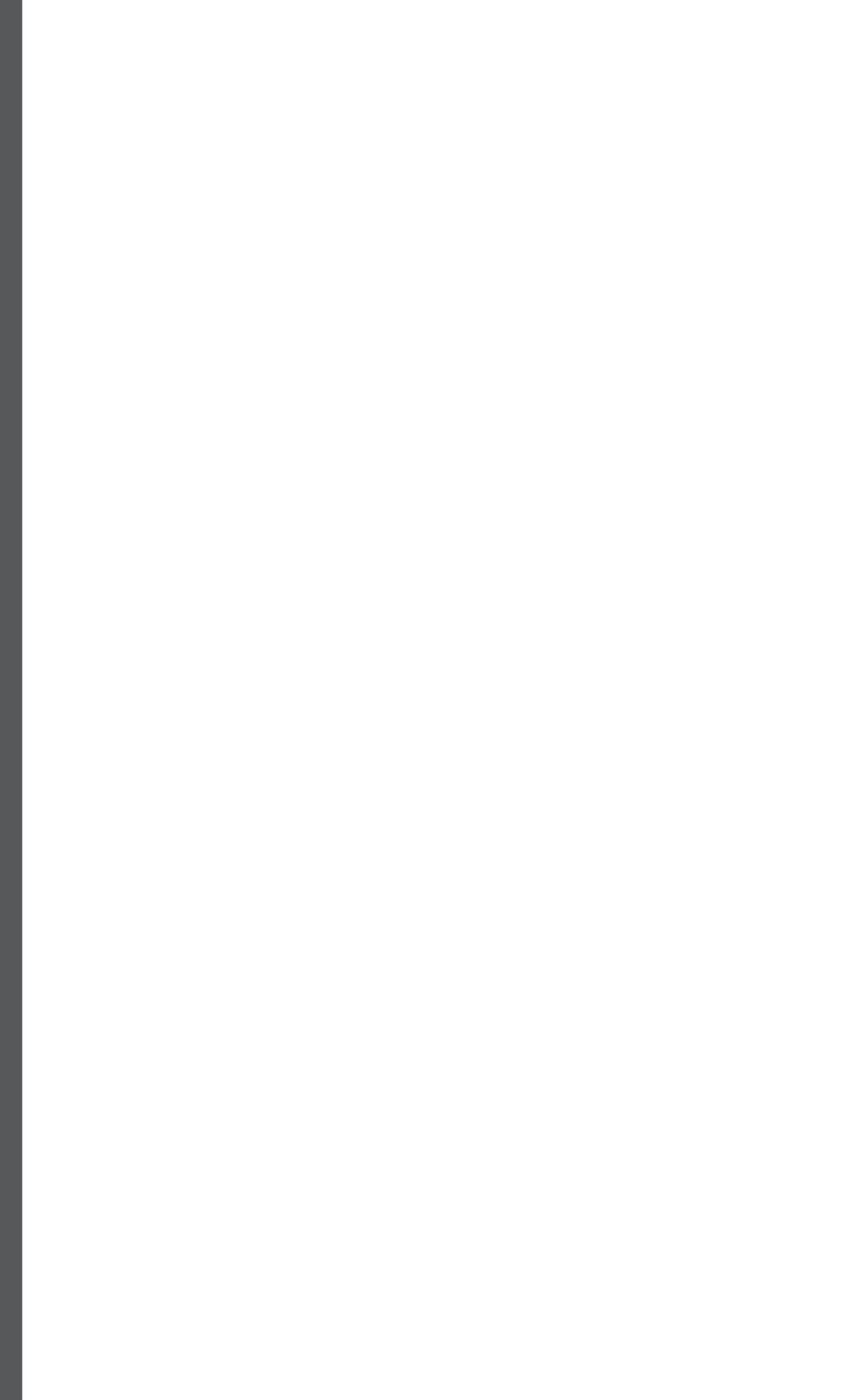
ON BOWIE
(ORIGINALLY PUBLISHED AS **BOWIE**)
BY **SIMON CRITCHLEY**

COPYRIGHT©2016 BY SIMON CRITCHLEY
JAPANESE TRANSLATION PUBLISHED BY ARRANGEMENT
WITH DR BOOKS LLC THROUGH THE ENGLISH AGENCY
(JAPAN)LTD.

- わたしの初体験 7
- エピソード的点滅 13
- アートのみだらなレッスン 19
- ワンダフル 27
- ハイデガー流の退屈論で退屈にさせるわたし 31
- ユートピア的な何か 41
- シニア ライア 45
- 見者は虚言者である 45
- 無を堅持すること〔何ものにもすがらぬこと〕 53
- 宇宙空間のハムレット 63
- ゲット・イット・ヒア、シング
- デリストピア―ここで手に入るもの 69
- レ・トリコトウーズ
- 編み物をする女たち 77
- 不条理なものの威厳 87
- 幻は幻に 97
- デイシプリン 107

- 消失 115
- あこがれ 121
- ユル・セイ・ユール・リーヴ・ミー
- あなたはわたしから去ってゆくと言う 135
- リアリティに見切りをつける 143
- 神の墓のうえで遊ぶ 155
- 恐れなしに〔「恐るべき無」〕 165
- 太陽、雨、火、わたし、あなた 173
- ノーと言いながらイエスを意味する 183
- マンデイ
- 月曜はいったいどこに行った？ 195
- ラザルス、ニュートン、グラフィス 207
- テイク・ア・ボウ
- シーラ、お辞儀をして 223
- 感謝の言葉 233
- 日本語版へのメッセージ 235
- 訳者あとがき 237

歌詞ほか引用作品(作者)一覧



わたしの初体験



いささかまごつかせるような告白から始めさせてほしい。わたしの人生を通して、デヴィッド・ボウイ以上に大きな喜びを与えてくれた人物はいない。もちろん、たぶんこのことはわたしの人生の質について多くを語っているのだろう。誤解しないでほしい。素晴らしい瞬間は幾度もあったし、ほかの人の巻き込んでいた場合だってあった。しかし、数十年以上にわたって変わらず持つ続ける歓喜となると、ボウイがわたしに与えてくれた喜びに匹敵するものはない。

すべてが始まったのは、ほかの多くの平凡なイングランドの少年少女たち

にとつてと同じく、一九七二年七月六日、BBCの伝説的な「トップ・オヴ・ザ・ポップス」でボウイが演奏した「スターマン」からだだつた。イギリスの住民の四分の一以上がその放送を見た。パンツスーツを着たこのオレンジ色の髪の毛の生き物がその腕をなよなよとギタリストのミック・ロンソンの肩に回すのを眼にしたとき、わたしは口をあんぐりと開けてあっけにとられてしまった。わたしを直撃したのは、その歌のクオリティというわけではなく、ボウイの外見から来るショックだつた。それは圧倒的だつた。彼はじつにセクシュアルでじつに機敏、とてもいたずらっぽく、そしてとても奇妙に見えた。気取つていながら同時に傷つきやすかつた。彼の顔は秘密の約束に満ちているように見えた——それは未知の快樂の世界への扉だつたのである。

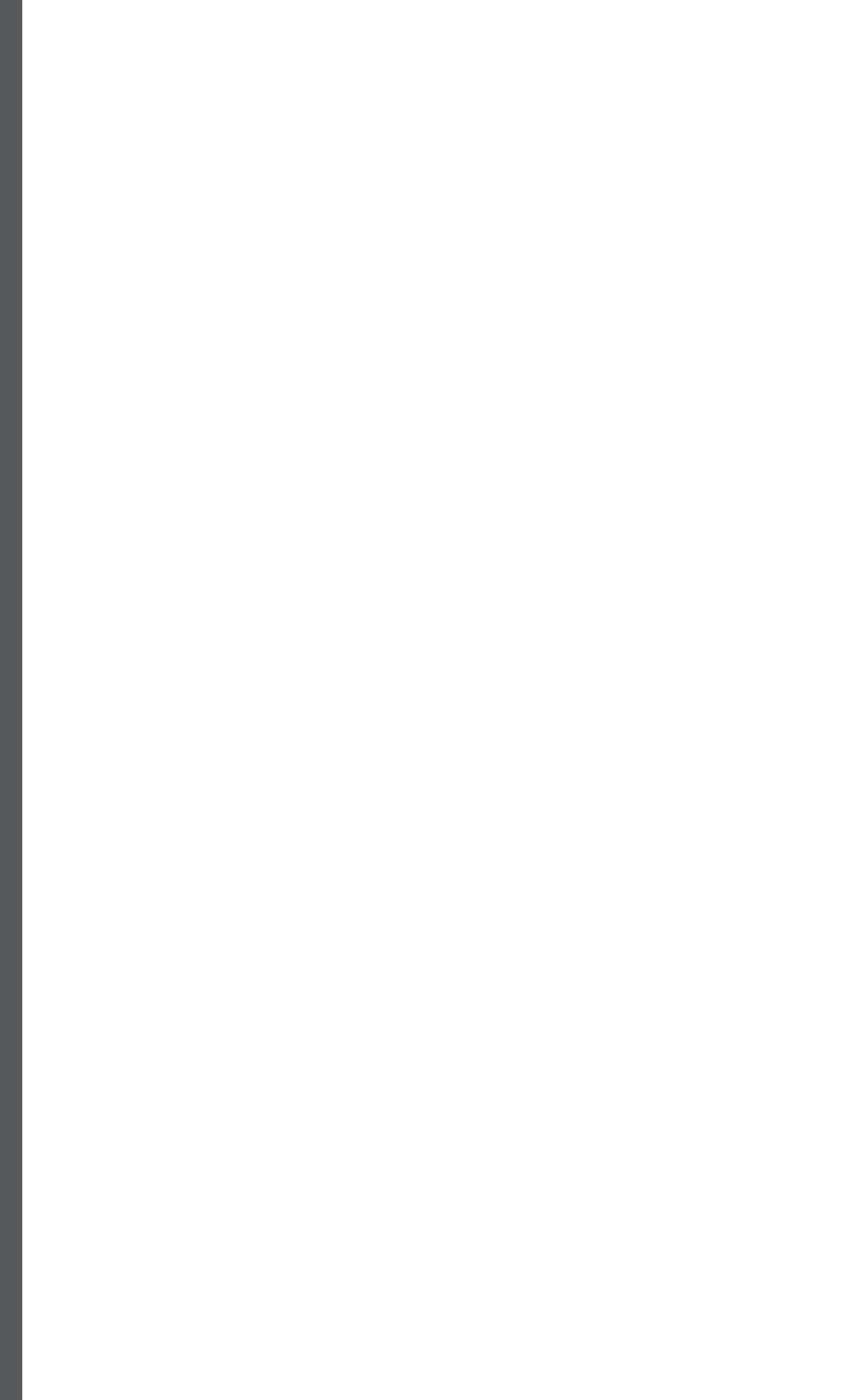
数日後、わたしの母シーラは「スターマン」のレコードを一枚買つてきた。

彼女がその歌とボウイの髪の毛を気に入ったからにほかならない（母は南部に来る前にリヴァプールで美容師をしていて、「一九八〇年代後半からずっと、ボウイはかつらを付けているのよ」と独断的に言い張るのがつねだった）。ジャケットのかすかに威嚇するような、仰角撮影されたボウイの白黒のポートレート写真と、七インチ・シングル盤上のオレンジ色のRCAビクターのラベルを覚えている。

わたしたちがダイニングルームと呼んでいた場所で（もったも、そこでわたしたちは食事をしていなかったのだけれど——なぜそうしようと思うだろう？——そこにはテレビがなかった）、何か理由があつて、わが家のちつぽけなモノラル・レコード・プレイヤーを前にしてひとりきりだったとき、わたしはB面を聴こうとシングル盤をさっそく裏返した。「サフラジェット・シティ」を聴きながら自分の身に起こった肉体的反応をとてはつきり覚えている。そのノイズがもたら

した純粹に肉体的な興奮状態は、凄まじすぎてほとんど耐えがたいほどだった。その響きはまるで……セックスのようなものだったのだろうと思う。セックスがなんたるかをわたしを知っていたわけではない。わたしは童貞だった。わたしは誰ともキスさえしたことがなかったし、したいともまったく思っていないかった。ミック・ロソンのギターがわたしの臓腑にぶつかってきたとき、それまで一度も経験したことがなかったような強烈で奇妙な何かを、わたしは自分の体内に感じた。婦人参政権論者の街とはどこだったのか？ わたしはどうやってそこに行ったのだろうか？

わたしは十二歳だった。わたしの人生が始まっていた。



エピソード的
点滅



「物語的自己同一性」^{ナラテイヴ・アイデンティティ}と或る人びとの呼ぶ見解が存在する。これは、人生とは一種のストーリーで、始まり、中間、そして終わりをもつという考え方である。たいていの場合、初期における何らかの決定的でトラウマティックな経験があり、中期にはひとつないし複数の危機があつて（セックス、麻薬、あらゆるかたち
の中毒がその役を果たすだろう）、ひとはそこから奇跡的に再生する。こうしたライフ・ストーリーはたいてい、地上には平和、すべての人びとには善意を、と願う、最期を前にした救いにいたつて終わる。或る人物の人生の一体性は、そのひとが自分自身について語ることでできるストーリーの一貫性のうちにある。人びとはこうした営みを絶えず行なっている。それは回想録という観念の背後

に存在するまやかしである。そのようなものこそ、出版産業に残されたもののかかなりの部分を占める存在理由レゾン・デートルであり、この産業は創造的ライティングの講座というおぞましい奈落の世界から養分を吸い上げている。それに対抗して、そしてシモーヌ・ヴェイユとともに、わたしは脱創造的ライティングを信じている——絶えず上昇する否定の螺旋を通じて進み、その終着点は……無ナンであるような、つまり、どこにもたどり着かないような。

わたしはまた、アイデンティティとはとてももろいものだとも思う。それは何か大きな物語的統一であると言うよりも、せいぜいのところ、エピソード的点滅の連続にすぎない。デヴィッド・ヒュームがはるか昔に証明したように、わたしたちの内的生は、おびただしい汚れた洗濯物のように記憶の部屋のあちからこちらに散らばっている、知覚のばらばらな束から成り立っている。このこ

とがおそらく、テクストを一見したところランダムにハサミで解体し再結合する——そしてよく知られているようにボウイがウィリアム・バロウズから借用した——ブライオン・ガイシンのカットアップ技法が、いかなるヴァージョンの写実主義よりもリアリティによりいっそう接近していることの原因なのである。

わたしの人生に何らかの骨格を与えているエピソードの数々は、驚くほどしばしば、デヴィッド・ボウイの言葉や音楽によってもたらされている。彼こそが、わたしの知っているほかの誰とも異なるかたちで、わたしの人生をひとつにまとめ結びつけてくれていたのである。たしかに、もしかしたら語れるのかもしれないほかの思い出やほかの物語もあるのだが、わたしの場合、十八歳のときに工場で経験した深刻な事故に続いて起きた記憶喪失のせいで、このあた

りの事情が複雑になっている。手が機械に挟まれたあと、多くのことを忘れてしまったのである。しかし、ボウイはずっとわたしのサウンドトラックであり続けてきた。変わることもなく、わたしの秘密の同伴者。良いときも悪いときもわたしにとって、また、彼にとって。

印象的なのは、こんなふうに考えるのはわたしひとりだけとは思えないという点である。ボウイが、力強い感情的な結びつきを許し、自分たちを解放してくれる存在だった、そんな人びとの世界というものがあって、そこでは、何か別の種類の自分自身、より自由な何か、もっとクィアで、もっと誠実で、もっと開放的で、もっとエキサイティングな何かになれたのである。振り返って考えてみれば、ボウイは過去についての、その栄光と輝かしい挫折についての、しかしまた、現在における或る種の不変性と未来の可能性についての、いや、

それどころか、より良き未来の要請のための、一種の試金石だったのだ。ボウイはどこかのロックスターなどではなく、バイセクシュアリティやベルリンのバーにまつわる、精彩を欠いたメディアの一連の常套句でもなかった。彼は恐るべきほどに長いあいだ、人生をほんの少し平凡ではないものにしてくれる何者かだったのである。

アートのみだらなレックスン

